

体言締め文における主題と文末名詞との関係について

谷 守 正 寛

キーワード：体言締め文，文末名詞，主題，主題ネットワーク，受皿語

英文要旨

This study aims to illustrate how the essential principle of topic sentences holds, exploring the function of the topic particle *wa*. Topic sentences with the sentence-ending noun, including noun-concluding construction sentence and eel-sentence (*Unagi bun*), are considered from a new viewpoint, and their essence will be clarified.

First, *wa* does not indicate the logical case relation between the topic and the sentence-ending noun, but just combines them. In this paper, with the new concepts of topic-network and Saucer-word, the principle that the latter (noun) is extracted and comes out from Element-information contained in the former (information-network) is tentatively established. As soon as *wa* bundles information a speaker wants to convert into the topic, the topic-network will be created in an instant in his/her mind and a variety of Element-information will be connected reciprocally and networked in it.

Element-information contained in the topic-network which a speaker wants to describe most is extracted and put at the end of sentences as a noun (Saucer-word). An eel-sentence is also realized to be the same type of topic sentence, and the same principle can be applied to it. That is, an eel is just the element information having been taken into the topic *boku* (me) when the speaker thinks of ordering some food looking over a menu. Showing that the same simplified principle also properly explains Headline-construction (*Midashi kōbun*) will let the prototype of topic sentences be more flawlessly set up. In this way, the essential function of *wa* is also illustrated in this paper.

1. はじめに

日本語では頻繁に用いられるが、珍しい文であるとして、角田(1996)は「体言締め文」

(noun-concluding construction) を独自の文型として提案し、類型論の観点から考察した。また、角田(2011, 2012)においては、はじめに節(文)があり、名詞がそれに続いて、いわゆるコンピュータ「だ」で終わるため、1つの文において異質な前半部(人間)と後半部(魚)が合体しているという意味で、「人魚構文」(mermaid construction)と呼び直し、やはり、実に奇妙な構造を持つ文であり、世界的に見ても珍しいと繰り返し述べている。

すなわち、次のような構造(1)と文(2)である。

(1) 体言締め文(または人魚構文)

[節] 名詞 だ。

(2) [太郎は名古屋に行く] 予定だ。

角田(2011)は、これが奇妙である理由として、意味の上では、太郎は人間であって予定ではないこと、統語の面では、文の前半部分である[節]の部分動詞述語文と同じ構造を持っているにもかかわらず、後半は[名詞 だ]で終わる名詞述語文と同じ構造を持っていることを挙げている。本稿では、便宜上、(2)のような文を「体言締め文」、コンピュータ「だ」に先行する名詞を新屋(1989)に倣い、とりあえず「文末名詞」と呼ぶこととする。

しかしながら、こうした「奇妙」である現象を生み出す原因となる文中の要素についての指摘や考察は特に見られない。つまり、(2)においては、「予定」という文末名詞に内因があるのか、あるいは名詞に付く「だ」にそうした奇妙な文を生み出す働きがあるのかといった分析と考察であるが、これまでのところないようである。

本稿の目的は、体言締め文が示すとされる奇妙さが、文末名詞及びそれに続く「だ」自体の問題ではないと考え、文構造の捉え方について新たな提案を行うことにある。すなわち、(3)のように、体言締め文が“奇妙な”構造の文ではなく、むしろ反対に、一般に「～は」で提示される日本語としてはごく自然な主題文であるという視点で、文構造を捉え直すことである。

(3) [太郎は [名古屋に行く] 予定だ]。

つまり、(2)と(3)との捉え方の違いは、前者では「太郎は名古屋に行く」という主題を含む文に「予定だ」が後ろから追加された構文とみるのであって、したがって、奇妙な文だということになるのだが、本稿の捉える後者(3)の構造は、「太郎は予定だ」という主題文を基本文として、「名古屋に行く」は「予定」を修飾する連体節であるとみる点である。

角田(1996)では、体言締め文が南不二男の言う疑似名詞述語文とも違い、むしろ逆に、動詞文や形容詞文と共通の性質を持っているとされる。そして、(2)において「名古屋に行く」は連体節ではなく、「太郎は名古屋に行く」という動詞文に、いわゆる「文末名詞+だ」が付いた構造となる。なお、文末名詞の細分については、荒屋(1989)、角田(1996)に詳しく、本稿では主題に目を向けることにし、特に考察の対象とはしないでおく。

さらには、(4)(5)のような「見出し構文」(田中 2012)を、(3)と同様に、主題文に由来する文構造であると捉える。

(4) メジャーリーグのイチロー選手が電撃移籍です。

(5) 尖閣諸島で、新たな動きです。

本稿では、こうした別扱いにされているいくつかのタイプの文も、体言締め文と同様に捉え、いずれのタイプをも包摂する日本語の主題文のシンプルなプロトタイプを提言する。

2. 主題文の雑例

Tanimori(1994)においては、(6)のような日本語の文のプロトタイプにおける主題を受け止める文末の名詞を saucer という概念で捉えた。これを本稿でも援用することとし、便宜上「受皿語」と呼ぶことにする。もっとも、文末名詞の場合は特殊な性格を持つ名詞に限定されているが、普通の名詞文において表れる文末の実質名詞なども受皿語とみなす点で両者は若干異なる。

以下、Tanimori(1994)における主題文の基本構造を、表示方法に若干変更を加えて示す。

(6) [現象描写文／無題文]

[[主題] は _____ [受皿語] だ]。

Tanimori(1994)では、受皿語とは、①主題によって要求され、②主題と同一にあるもの、③主題を包摂するもの、④話し手にもっとも思い起こさせるものであり、現象描写文・無題文を受ける位置に置かれるとされる。いわば、主題という椀から溢れ出る〈内容〉を受け止めると同時に椀を安定させる立場にある受皿として「文末名詞」の位置に来るわけである。本稿では、この解釈を踏襲し、受皿語が主題とは基本的に論理的格関係がなくてよいことを主張する。

また、谷守(2006)においても同様に、名詞文ではないが「XハYガZ」という雑例文における主題Xと後続するY・Zの間には論理的確関係がないことを指摘している。ここでは、XとはY・Zが展開される‘場’であり、その場は話し手の視覚・聴覚等の感覚器官によって捉えられる感覚反応の情報が言語化されたものであるという仮説を立てている。(7)のような文を、主題文の雑例としてはじめて明確に言及したのは三上(1960)であった。

(7) このにおいは、ガスが漏れているにちがいない。

(7)において、「このにおい」とは話者が嗅いでいるまさにその臭いそのものを指し、例えば「ガスのこのにおい」といった文要素としてあった被修飾語から来ているわけではなく、では一体「このにおい」はどこから来ているのか、そのソースをよくよく探せば、それは嗅覚反応による感覚情報しか見当たらず、それが言語化されたのだとみている。そして、「ガス」や「漏れている」といった文要素どうしは言語的に格関係（この場合はガ格）を有するが、もともと文要素ではない「このにおい」とはそれがない。「あれは、人が死

んでいる！」と言えば、「あれ」とは人が死んでいる視覚的場面なのである。

上の「このにおいは」や「あれは」のように、感覚情報が意味説明的な語としてではなく、感覚反応自体を元に言語化され、「は」によって主題化されるというのは、突拍子な説明のように思われるかもしれない。しかし、まず、ほかに主題化される元の情報が見当たらないこと、オノマトペのような感官を通じて得られる情報に限らず様子・雰囲気・物理的形狀・心情等までも対象として、日本語ではいとも簡単に即座に言語化することができる（しかもその語数が多いのほかの言語に比べて突出して多そうである）ことなどを考えれば、特に驚くことではないと考えている。

このようなわけで、「ガス」や「漏れている」といった文要素とは論理的格関係がないままに、「このにおい」が主題化されると、依然として格関係がないままに主題文として成立することになり、雑例として扱われたとみたわけである。

さて、「は」はいろいろな格を代行するという。しかし、格を‘代行する’とは一体どういうことなのかについては、その言葉以上の説明がなく、明確ではない。はたして、主題がそれに続く文要素との関係において、論理的関係を持ち合わせ、さまざまな格を内在させているとみなすのは、実は論理的格関係を後付けしたものにすぎないのかもしれない。そして、どうしても格関係が見つからない場合に、いくつかの先行研究において格関係がねじれている、破格型であるなどとされ、雑例扱いにされてきたのであらうと思われる。

格関係が「ねじれている」と言う時、例えばガ格がねじれて何格になり、ではいったい次にそれがどのような論理的関係を表しうるのかが皆目分らないのである。雑例において格関係が見当たらない（＝無い）以上、そもそも存在しない格について、ねじれているなどと言うことは、それが一体どういう意味なのかが依然分らないままなのである。

主題とその他の文要素との格関係が‘ねじれている’として雑例扱いにされる主題文については、谷守(2006)では「日本語話者にとって、周知的なもので何か異常さを感じさせるものではなかろう」と指摘されるように、現代文法では代行すべきであらう格関係が「見当たらない」からといって、本稿でも異常な文だとはみなさないでおきたい。あるいは、「ねじれている」格関係があるとすれば、そのことと実際に格関係が見つからないのとは、本質的に異なるはずである。いずれにせよ、それが現代語においても何ら異常ではないはずの表現に対しても、格がねじれているとか破格型であるなどと言わざるをえない状況の解決策は、そもそも代行する格が最初から無いのだと考えれば、シンプルに済むということであらう。

「は」が代行するとみられる格とは、つまりは、格助詞による格関係が非常に強力な論理を誇示するために、その捉え方を、格助詞ではない「は」が本質的に異なる機能を持ち合わせうるにもかかわらず、文要素間の論理的関係を都合よく後付けして繋ぎ合わせ、便宜上、設定したものではないであらうかと考える。

3. 主題と文末名詞をめぐって

3.1 「春は曙」について

名詞文について話を戻すと、(7)のような格関係のない主題文であっても異常ではないと言えるのは、次のような千年以上も前の古文においてすらすらに自然に成立していたことをみれば、容易に納得できるはずである。

(8) 春は曙。(『枕草子』より)

周知の通り、(8)において「春」と「曙」には論理的格関係がないものの、また、田中(2012)では『春は曙(あけぼの)』に代表されるように、文末に名詞を置く形の文(文末を名詞で締める形の文)は、もともと日本語として特に異端視される表現ではなかったと思われる」とも述べられているように、現代においても何ら異常さが感じられまい。「もともとそうではなかった」どころか、現代においても依然変わらないことを再確認しておきたい。なんといっても、現代語の格関係、さらには格の代行といった概念が生まれるはるか昔に遡って、現代文法のまともの格関係を前提として、「春」と「曙」との格関係が異常であると述べるのは、時系列的にみてもやはり無理であろう。

また、(8)は(9)のように、無題文を連体節として受皿語に付けることも容易であることから、基本的に(6)と同じ構造であることが予想できる。

(9) [春は [なんといっても 空が紅い] — [曙] だ]。

Tanimori(1994)にしたがえば、「は」によって括られた「春」という概念・範疇の中に含まれる「曙」という、話者がもっとも発したい情報を滲み出させた(絞り出した)、あるいは、取り出したのが(8)ということになる。なお、曙は春だけでなく、当然、ほかの季節に限らずさまざまな概念・範疇にも含まれる情報である。つまり、ある特定の小情報がある主題に含まれたからといって、ほかの主題に含まれないということではない。

そこで、主題として「は」によって括り出した概念・範疇等を、受皿語がそこから抽出される情報網であるという意味で、以後、便宜上「主題ネットワーク」(topic-network)と呼ぶことにし、その場合の主題を<>で表示することにする。これは、語で表されるあらゆる情報がシナプスでネットワーク状に繋がれたものをイメージするという意味合いを示唆している。また、受皿語として置かれるもとの小情報を、便宜上、「要素情報」(element-information)と呼ぶことにしたい。

<春>が「は」によって括られれば、瞬時にして主題ネットワークとなり、そこに含まれる「曙」という、話者がもっとも述べたい要素情報を名詞として取り出し、「だ」で文として終結させる。そして、<夏>という主題ネットワークでは、「夏は夜」というふうには、「夜」がそこから取り出されるわけである。

主題と受皿語には論理的格関係がなくてもよいために、上で「滲み出させる」、「絞り出す」、「取り出す」といった表現で述べたが、「は」で括られた主題ネットワークの枠内から、ただ話者が、その時その場でもっとも言いたい重要な要素情報を取り出して「は」で

繋げたにすぎないために、当面はそのような表現で言うことにしたい。ここで格関係を構築すると、文末の名詞は主題の属性、性質、種類…を表すといった細分化の方向に陥ることになり、主題が属性の主体、動作主、所有主、範疇を構成する要素等であるといった具合に、際限なく分類されていくことになる。

文の成立後に、結果的に主題と受皿語との間に何らかの格関係が見出されれば、主題が○格を代行しているとか、○格の文要素を主題化したなどと言えよう。しかし、それをもって文の成立前から「は」が或る特定の格を、場合によっては、同時に複数の格を含んでいたことになるわけではないと考えることもできる。

(10) 東京は、今日行って明日帰ります。

例えば(10)を述べた場合の「は」は、文を読んでいくと行き先格「に」であったのが、突然に起点格「から」に変容していることが分かる。このことで、文成立前から、真逆の格関係を同時に有していたとみるのは、不自然であり無理があろうと言わざるを得ない。つまり、名詞文においては、語義どうしの意味的繋がりをみて、あくまで結果的に、例えば主題と受皿語の指示対象が一致すれば同定文、包含関係にあれば措定文などとしているにすぎないとも言える。

(9)の「春」は、(7)の「このにおい」と同じく、話者が発話に先立って「は」によって括り出した主題ネットワークである。「このにおい」において、そこに含まれる文要素となる情報（ガス・漏れている）が展開され、話者によって発せられたのと同じように、「春」に含まれ、話者が発したい「曙」という要素情報が、この場合は名詞（受皿語）として置かれたことになる。ただ、発話時に感官をとおして発生した反応である臭いとは違って、「春」は話者内にすでに知識として保存されていた情報のかたまりであるという点で違いはあるが、述語が展開される‘場’としては同じ機能を実現している。

さて、「だ」を付けて「春は曙だ」として(11)のように解釈した場合は、奥津(1978)にしたがえば、ダが述語「がいい」を代用していることにもなる。

(11)春は曙がいい。

島守(1993)の指摘するように、ダの述語代用説では、ダを欠く(8)の説明がつかなくなることから、本稿でもダの述語代用という捉え方は採らず、あくまで「は」の問題として考察するのが適当だと考える。いずれにせよ、(8)にダを付けると、ダの述語代用説でも説明しうる(11)のような解釈ができるということは、体言締め文がウナギ文にも通じる性質があることを示唆している。

また例えば、半藤(2002)では、「春は曙に限る」といった意味的補助に頼って文意が理解できるとし、(8)が省略的な表現だとしている。しかし、本稿ではあくまで、意味的補助なしに、それだけでも完結した表現としてごく自然に成立する文であるということを主張したい。

従来「は」の分析は細分化の方向に進んできたが、本稿では、体言締め文はウナギ文に通じ、基本的に同じ(6)型の主題文であるとして、シンプルに統合化して捉えていく方向

である。

3.2 体言締め文とウナギ文

体言締め文とウナギ文の共通点を探るべく、さらに比較・考察してみる。

(12) [太郎は[名古屋に行く]予定だ]。(=(3))

(13) [太郎は[名古屋に行く]バスだ]。

言うまでもなく(13)がウナギ文であるが、体言締め文が奇妙であるとすれば、(12)の太郎が予定でないのと同様、(13)の太郎もバスという乗り物ではない点で、奇妙さにおいては同じでなければならない。また、上述の主題と受皿語との関係からみれば、「予定」も「バス」も<太郎>という主題ネットワークに含まれる要素情報にすぎないと考えることができる。違いは(13)においては連体節を付けるのが任意であることであるが、受皿語との関係においては本質的な違いはない。「予定」という語が、その内容の叙述を要求する性質の名詞であることが、両者が異種の文であるとみなされる原因であろうが、名詞の性質の違いについてはここでは立ち入らずに、文構造では本質的に同じであることをみる。

体言締め文とウナギ文について、太郎が予定でないとかバスでないといった次元での奇妙さをもって、いずれもが特殊な文であるとするならば、「太郎は風邪だ」といった平凡な表現においても、太郎は風邪という病気ではないから奇妙な文だということにもなりかねず、これでは大いに不都合である。

本稿で「は」をより統合化して捉えるというのは、太郎と予定・バス・風邪などとの論理的格関係を細分化して探るのではなく、むしろ反対に、太郎という情報・知識の枠組、すなわち主題ネットワークに含まれる要素情報を取り出して主題に繋げるという働きを、「は」の本質的な機能として明確に立てることである。

体言締め文である(12)では、話者は発話時において、<太郎>という主題ネットワークの中に、「名古屋に行く予定」が要素情報として含まれていることを認知している。その要素情報を主題<太郎>から抽出して受皿語に据えたわけである。

また、したがって、主題<太郎>とは、谷守(2006)でもウナギ文をめぐってふれているように、生身の人間の太郎自身を指すわけではないという捉え方が、ここでの体言締め文に対する独自の新たな視点である。もし太郎を生身の人間とみなす見方のままであれば、当然、太郎は人間であって予定ではないので、体言締め文が奇妙に映らざるをえないままになるだろうが、「は」の本質を上のように考えれば合理性が見出され、奇妙ではなくなるのである。

一方、ウナギ文である(13)では、話者は発話時において、<太郎>という主題ネットワークの中に、名古屋に行くバスに乗るという要素情報が含まれていることを認知している。そこで、その要素情報が名詞で表されれば「名古屋に行くバス」となり、主題<太郎>から導き出され、文末に据えられるわけである。太郎はバスでないにもかかわらず、この文が言えるために特別扱いにされているが、日本語の主題文としては主題と受皿語

<図1>

主題ネットワーク<太郎>		述部
名古屋に行く予定(を組んでいる)	→	名古屋に行く予定だ。
名古屋に行くバス(に乗る)	→	名古屋に行くバスだ。
大学生…	→	大学生だ。
ウナギ…	→	ウナギだ。

とを連結・結合した、あくまで自然な表現であることを、改めてここで主張したい。

以上のことを図示すると図1のようになる。<太郎>に含まれるさまざまな情報の中から名詞となる要素情報を抽出して、「だ」を伴って主題に連結される述語を形成するのである。論理的格関係をいっさい気にせずに、いろいろな受皿語が自在に取り出せることが分かる。

いずれにおいても、「太郎」と聞くと、誰しも太郎という人間をイメージとして思い浮かべる傾向があろうが、<太郎>は人間の太郎を指すわけではなく、話者の記憶内にある太郎に関わる諸情報のネットワーク(図1内の点線枠)のようなものであると考えればよい。「は」によって<太郎>という主題が括られるや否や、太郎に関わるさまざまな情報がネットワーク化され、一斉にまとめられる。そして、話者が述べたい要素情報をそのネットワークから抽出して、ただ単に「は」に続けるだけでよい。なお、本稿では体言締め文について考察するものなので、それが形式上、基本的に、名詞(受皿語) + 「だ」となって文が収まることになる点についてのみ述べることにしている。

とはいうものの、ついでながら言えば、(7)は名詞文ではないが、図2におけるように、図1と同じ構造であることが示しうる。名詞文以外についての詳しい考察は別の機会に譲りたいが、実は(7)の動詞文についても、論理的格関係を考慮せずに、名詞だけを取り出せば「このにおいはガス漏れだ」や「このにおいはガスだ」といった名詞文に、いとも簡単にしかも自在に変換できることに注目されたい。「ガス漏れ」や「ガス」といった名詞(文末名詞；受皿語)は、「このにおい」という主題ネットワークに含まれ、受皿語となる要素情報である。

<図2>

主題ネットワーク<このにおい>		述部
ガスが漏れている	→	ガスが漏れている。
ガス漏れ…	→	ガス漏れだ。
ガス…	→	ガスだ。

3.3 他の様々な主題文の原理

3.3.1 「は」の機能

本稿での「は」の機能の捉え方に通ずる先行研究の説明としては、次の指摘が挙げられる。

まず、大野(1978)における、ハの上が問いでありその下には説明が要求され、問いに対する答えが結合して終結するが、ハは格を決める役目を負わず、格には関係しないという説明である。また、尾上(1981)では、1つの事態が成立する場合にハの上項と下項はどのようなものであってもよいとし、論理的格関係を問題としないということが説かれている。

本稿での「は」の捉え方は、このような考え方と共通する側面があり、論理的格関係を持たない主題と文末名詞との連結という本稿の主張とは矛盾しないとみる。ただし、どのように文末名詞が表れるのかについては、これまでの研究では言及されておらず、さらにその点について考察を進めるのが本稿の目的でもある。

話者の持つ主題に関わるさまざまな情報のネットワークが「は」によって括られ、つまりそれが主題ネットワークになると上述したが、その中に含まれる要素情報のうち、話者がかかき料理がもっとも述べたいものが名詞としては文末名詞となり、それが抽出され「は」によって主題と連結・結合されるという捉え方である。受皿語は、主題ネットワークに含まれる情報のうち、話し手にもっとも思い起こさせ言わしめるもの、主題と同一にあるもの(同定文の場合)、主題を包摂するもの(措定文の場合)などである。

3.3.2 「かき料理は広島が本場だ」構文

野田(1996)では、「『は』が使われる文」として6つの構文を挙げている。その主題を持った文のうち、名詞文としては(14)がある。

(14) かき料理は広島が本場だ。

野田(1996)では、(14)のタイプを「かき料理は広島が本場だ」構文と呼び、(15)のような格関係がもとになっているとしている。(下線は筆者による。以降も同じ。)

(15) 広島がかき料理の本場 (であること)

つまり、「かき料理の」が主題に指定されると、「の」が消えて(16)のようなプロセスをとるといわけである。

(16) [[かき料理の] は 広島が本場] → [[かき料理] は 広島が本場だ]

もっとも、本稿では細分化の方向はとらないので、実は、(14)についても本稿でいう主題文の基本原理で説明できると考えている。つまり、<かき料理>という主題ネットワークが形成されるや否や、言うまでもなく、誰もが周知の「広島が(その)本場だ」という要素情報がにわかに含まれ、それが取り出されて述部に置かれることになる。「本場」が本稿の言う受皿語である。ところで、「広島が」の部分は(6)に示す連体節としてみるには特殊な形式であり、これについては後述する。

「かき料理は広島が本場だ」文に対する野田(1996)による構文の捉え方は本稿とはこの

ように異なるが、文末の名詞の性格をめぐっては共通する重要な見方もある。すなわち、本稿では「話者がその時その場でもっとも言いたいものを取り出して『は』で繋げる」と上述したが、野田(1996)では、「こうした名詞の特徴をひとことでいえば、主題になっている名詞（つまり『かき料理』の部分）にとって重要な側面を表すものということになる」（p.48）と述べていることである。これを敢えて本稿の言い方で換言すれば、「<かき料理>という主題ネットワークに含まれる『本場』は、話者にとってもっとも重要な側面を表すものである」ということであり、文末名詞の主題に対する関係の見方にはある種の共通点があるとも言える。

(8)の<春>にとっては、重要な側面を表すものが受皿語「曙」であり、本稿の言う原理にしたがえば、<春>の中から「曙」が取り出された（絞り出された）名詞として連結され、「だ」で文を収束させたことになる。「春」と「曙」との論理的格関係がねじれているとか、(8)が破格型であるという言い方で、古来の自然でまもの日本語文について異端視する必要性はまったくないことになる。なお、本稿で主題ネットワークとして捉えるものは、野田(1996)の言うような「主題になっている名詞」には限定せず、副詞句なども含めるが、便宜上、当面は名詞に限って述べている。副詞句の場合については見出し構文のところでふれる。副詞句の場合は、なおさら名詞との格関係はあり得ないのである。

また、野田(1996)によると、「この構文の述語に使われる典型的な名詞が一方にあり、…（中略）…述語に使われることがない典型的な名詞がもう一方にあり、そのあいだに条件によっては使われることがある名詞がある」とされる。これは、本稿の解釈に照らせば、「ボクはウナギだ」について、ボクという人間がウナギではないにもかかわらず、文として言えるのは、<ボク>に対するウナギの関係、つまり、条件によっては、主題になっている名詞（つまり「ボク」）にとって重要な側面を表すものであるという条件によって発生する特定の関係によって、「かき料理」に対する「本場」と同様に、「ウナギ」が主題「ボク」に結合されて文末に置かれる名詞になるということである。つまり、これは本稿で扱う体言締め文がウナギ文にも通じることを示唆している（図1参照）。

ウナギ文とされるものは、奥津(1978)ではダの機能をめぐって論究されたものだが、実は「ボクは…」という主題文である。そこで本稿では「は」の機能に関わる問題の表れとしてみている。つまり、上述の原理によって、主題と名詞（受皿語）が結合可能であるにすぎない。「条件によっては」(野田 1996)という条件とは、食堂でメニューを選ぶという状況であって、その場の意志主体である<ボク>という主題ネットワークが、主題化された時にメニューの「ウナギ」が食欲の対象として含まれたにすぎないということである。同定文「ボクは太郎だ」を述べる場合の「太郎」は、<ボク>に常在する要素情報であるのに対して、「ウナギ」は通常<ボク>には含まれにくい。だからある特殊な条件が伴わないと文自体が特殊に映るのである。メニューを眺めつつ「ボクは…」と述べ、「は」によって<ボク>を主題ネットワークとして設定した瞬間に、その中には欲求対象となる選択肢「ウナギ」が取り込まれる。そこで「ウナギ」が受皿語として取り出せるような

主題化のプロセスが形成されるのである。繰り返すが、同様に「春は曙」では<春>を主題化した時に「曙」が取り込まれたのである。

ここで、いわゆる一般の名詞文についても同様のことを指摘したい。例えば、同定文である「ボクは太郎だ」であれば、「は」はガ格を代行していると言われるが、<ボク>に含まれる「太郎」という名前が受皿語として抽出され、連結されたにすぎないと考えれば、きわめてシンプルに上の原理に従っていることが予想される。措定文であれば、<ボク>に含まれる「学生」という範疇・概念が受皿語として主題の持つ諸情報から抽出され、連結されたとみれば、やはりシンプルにすむ。つまり、同定文や措定文の場合、「は」は見かけ上ガ格の代行にみえるだけであろう。なお、ガ格以外の、例えばヲ格を代行する「は」を含む「この本は父が買った」のような文については、名詞文を扱う本稿では、とりあえずふれないことにする。

3.3.3 「いい天気だ」構文

次に、井上(2010)の「いい天気だ」構文についてみる。「いい天気だ」構文とは(17)のような文である。そして、(2)であれば(18)のように捉えられ、「所有型の体言締め文」と呼んでいる。なお、ここではふれないが、別に「所在型」も設けている。

(17) 今日はいい天気だ (天気を有する)。

(18) 太郎は名古屋に行く予定だ (予定を有する)。

井上(2010)では、「N1ハ [X N2] ダ」において、N2とXが所有型の体言締め文では内容補充の関係、「いい天気だ」構文では限定の関係にあるという点で違いがあることを指摘しつつも、「いい天気だ」構文が所有型の体言締め文と連続的な関係にあるとしている。

本稿では、N2をXが内容補充するか限定するとみるかに関わらず、(17)は体言締め文であり、さらには一般の名詞文と同じく本質的に同じ生成プロセスを経た主題文と捉える。すなわち、<今日>という主題ネットワークに含まれる「いい天気」が抽出されて受皿語に置かれたということである。

ただし、井上(2010)に次のような注目できる説明がみられ、本稿の捉え方にも通じるものがあるとみる。

…「今日はいい天気だ」が表すのも、状況が持つ構造の中には「天気」という部位と「いい」という属性により形づくられる構造があり、それを「今日」が現実の構造体として有している…

すなわち、主題「今日」が「いい天気」を含んでいるという意味でもある。さらに本稿の考え方に援用して換言すれば、(17)は、主題ネットワークである<今日>が、無題文「いい」+受皿語「天気」、つまり「いい天気」という要素情報を有しており(含んでおり)、話者がその時もっとも述べたい要素情報として取り出し(要素情報が主題ネットワークから抽出されて)、文末に置いた表現である、ということになる。

3.3.4 「は」が格関係を有する場合と有しない場合

< 図3 >

「は」が格関係を有する場合と有しない場合		
	代行する格	まともの主題文へ；主題化のプロセス
「は」が格関係を有する場合	ガ	ボクが太郎だ → ボクは太郎だ。
	ガ	ボクが学生だ → ボクは学生だ。
	ガ・ねじれ	? ボクがウナギを食べる → ボクはウナギだ。
	ねじれ	? 春が曙だ → 春は曙だ。
	ねじれ	? 太郎が名古屋に行く予定だ → 太郎は名古屋に行く予定だ。
	ねじれ	? 太郎が名古屋に行くバスだ → 太郎は名古屋に行くバスだ。
	ねじれ	? 今日がいい天気だ → 今日がいい天気だ。
「は」が格関係を有しない場合	無	[ボク [太郎]] → ボクは太郎だ。
	無	[ボク [ウナギ]] → ボクはウナギだ。
	無	[春 [曙]] → 春は曙だ。
	無	[太郎 [名古屋に行く予定]] → 太郎は名古屋に行く予定だ。
	無	[太郎 [名古屋に行くバス]] → 太郎は名古屋に行くバスだ。
	無	[今日 [いい天気]] → 今日がいい天気だ。

以上、体言締め文における「は」を中心に考察し、いくつかのタイプの主題文を通して、その本質的な共通機能を探ってきた。ここでひとまず整理しよう。

これまで、主題と文末名詞との関係と同様に、ウナギ文、同定文、措定文、「かき料理は広島が本場だ」構文、「いい天気だ」構文などの名詞文としての主題文においても、「は」の基本原理によって、主題と文末の名詞（受皿語）とが連結されることを考察した。

図3では、「は」が主題と文末名詞との論理的格関係を有するという、したがって、体言締め文などでは格関係がねじれているとみなされる従来の一般的な見方の場合（図中上段）と、「は」が論理的格関係を有しないという本稿の主張する捉え方の場合（図中下段）とを、比較できるようにまとめた。表中の「?」は安定しない、あるいは主題文と意味合いが一致しにくい表現であることを表す。下段では外枠の [] が主題ネットワーク、内枠の [] がそれに含まれる要素情報で、話者にとって重要なもっとも述べたいものであるが、一貫して同一の原理でどのタイプの主題文（名詞文）についても、より統一的に、より容易に説明できることが分かるだろう。

4. 見出し構文をめぐって

さて最近、(4)(5)のような「見出し構文」(田中 2012)というものが指摘されている。田

中(2012)によれば、「見出し構文」とは、

[文末が「事象名詞+です」となる「ニュース見出し」の表現]だと定義している。なお、とりあえず「です」は「だ」に相当するものとして、本稿では概ね同じものとして考察する。

それに先立つ鈴木(2010)ではこれを無題文とみなし、その意味的特徴として、「報道番組等でニュースキャスターが新しいニュースを取り上げる際、その切り出し方として特徴的に観察される。何らかの新しい動き・変化があったこと、あるいは事態が何らかの新しい局面を迎えたことを、新しい情報として聞き手に伝えるという機能を持つ。」と説明している。

鈴木(2012)では、「だ」の「動作付け」の機能や話し手の発話態度を伝える機能から、この構文の分析を試みているが、「公開映像は自分だとする男をめぐり、新事実です。」といった文では「動作付け」を行っているとは考えにくいことも指摘している。また、「心からありがとうございます」(2つの例文はいずれも(鈴木 2012)より)のような、ブログ等に見られる「感動詞相当句+です」という形の文が、なぜ多く見られるようになっているのかについても考察し、ブログの書き手が表明しようとしていることが、必ずしもブログの読み手と直接にその対象者と一致しているとは限らないという“ずれ”のために、明示的な表明を避けようと「です」を用いることで、話者自身が感じ、考えるものであるとの形で述べ、そのずれの問題に対処しているものだ、としている。

本稿では、しかし、上のように「だ」「です」のみの問題として捉えることはせず、また、無題文としては規定しない。あくまで「は」の本質的機能が関わる主題文だと考える立場である。田中(2012)においても、実は、ブログでは書き手が「感動しました」「反省しました」と直接に体験を述べるのではなく、「感動です」「反省です」とすることによって、あくまでそのように判断したのであるという態度で、それらの心情を表明していると述べているが、「(書き手が) そのように判断したのであるという態度で、それらの心情を表明している」という説明からも、判断文に近い性格を有していると言える。つまり、見出し構文は無題文であるとするよりも、「(～は)～だ」という有題文に近いことが窺えるのである。

また、田中(2012)では、多くの場合「が」を「は」に置き換えることができない、あるいは、有題文にすると不自然になる、と述べているが、では、一体なぜ、見出し構文が無題文であるのかについては、鈴木(2010)においても同じく、言及はされていない。つまり、文末名詞に先行する隠れた主題には特に関心を払っていないのである。

田中(2012)では、見出し構文が使われる位置として、NHKの場合は、主として、ニュース報道番組の冒頭、あるいは、番組内で項目が切り替わり、新しい話題を切り出すときを挙げている。また、民放では、CMに入る直前に、次のニュース項目の紹介としてよく使われるとし、その効果は、視聴者の関心をCM後まで引っ張ることにあると指摘している。これについては後述する。ただし、本稿では、その効果や意味的特徴につい

ては最小限にふれるにとどめ、もっぱら構造を中心に考察を進めたい。

そこで、(3)と同様に、見出し構文が主題文に由来する文構造を有すると考えるなら、(4)(5)については、それぞれ次のような構造を仮設することができる。なお、田中(2012)では、「○○が～です」をⅠ型、「(～で～です) (～に～です) (～を～です)」をⅡ型として区別しているの、(3)がⅠ型、(4)がⅡ型の見出し構文ということになる。

(19) [＜ごらんの場面(で)は＞ [メジャーリーグのイチロー選手が] 電撃移籍です]。

(20) [＜次の場面は＞ [尖閣諸島で、新たな] 動きです]。

ここで＜ごらんの場面(で)＞や＜次の場面＞という「は」でマーク・言語化された主題ネットワークは、テレビに映し出されたばかりの、田中(2012)のいう「冒頭あるいは新しい話題を切り出すときの」シーンを指し、ニュースを読み上げるアナウンサーによって発話時には言語化されておらず、視野に入ったばかりの視覚的場面である。

しかし、これはこれから情報を得ようとする視聴者にとってはきわめて重要な必須の主題に相当するものである。にもかかわらず、見出し構文の成り立ちをめぐっては、そうした先行するテレビシーンについて特に言及されていないのは十分ではないと思う。なお、(19)(20)の発話段階で敢えて主題を言語化して明示すると若干不自然さを伴うことがあるかもしれないが、ここでは概ね主題はそのような表現になるだろうというものである。

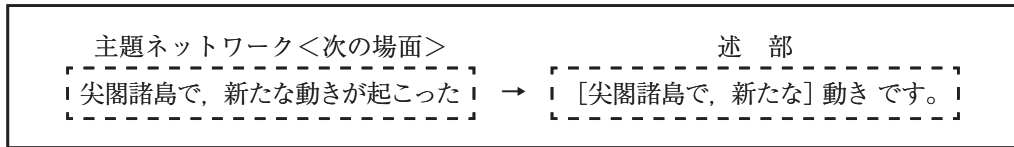
本稿でこれまでみてきた「は」の原理を使って考察すれば、見出し構文は、本稿で主に考察の対象とした体言締め文に通じるものであるというのが、新たな提言である。というのは、(19)(20)において、主題と受皿語とは論理的格関係がないことや、敢えて従来の体言締め文の性格を表す言葉を借りれば、「ごらんの場面＝移籍」ではないことと「次の場面(で)＝動き」ではないという論理によって体言締め文を奇妙とみる捉え方からは、同じく奇妙な文に映るだろうからである。もちろん、場面がそのまま移籍・動きである必要はない。

見出し構文の場合は、主題ネットワークである「冒頭あるいは新しい話題を切り出すときの」シーンから取り出された要素情報が名詞文として現出した主題文であると考えられる。視覚的な「冒頭あるいは新しい話題を切り出すときのシーン」を主題ネットワークであると捉えるのは、1つの理由として、もしそれが前後に存在しないにもかかわらず、唐突に見出し構文だけを述べるとおかしく聞こえるだろうからである。2つめの理由として、田中(2012)が現に指摘しているように、見出し構文は番組の冒頭、あるいは新しい話題を切り出す時にのみ表れるのである。それ以外では表れない。つまり、見出し構文が表れる必須の先行条件である「冒頭あるいは切り替わりの新しい話題」が、文字通り「主題」であるから、本稿の言う主題ネットワークになりうるのである。この「新しい話題」とは、それがなければ後続する見出し構文が表れないという重要な情報源であり、文成立の要件なのである。

このことから考えて、見出し構文に表れる名詞(受皿語)がこの主題ネットワークから抽出されているとみるのは合理的なことであろう。すなわち、例えば(20)を図4のように示

せば、次のような構図になる。

<図4>



ところで、この見出し構文では、受皿語にかかる部分は無題文ではなく連体の語句であるという点で異なりをみせている。すなわち、見出し構文は次のような構図になると言える。

(21) [格助詞を伴う補語]

「[冒頭または新しい話題を切り出すシーン]は _____ [受皿語]だ」。

(6)と異なる点は、受皿語に修飾する部分が、「メジャーリーグのイチロー選手が」や「尖閣諸島で、新たな」といった動的事態を伴う要素（副詞句）をマークする格助詞を伴う補語だという点である。しかしながら、この「格助詞を伴う補語」は動詞等を含まないにもかかわらず、(6)でいう現象描写文や無題文に類似した性格を有していると考えられる。なぜなら、修飾部が単なる形容詞的な連体句であれば、次のような名詞文であってよく、座りもよさそうだが、これでは見出し構文ならではの性格を十分に表出しないからである。

(22) [ごらんの場面(で)は[メジャーリーグのイチロー選手の]電撃移籍です]。

(23) [次の場面は[尖閣諸島での新たな]動きです]。

鈴木(2010)では見出し構文の形式的特徴として、「が／を／に」等の格助詞を持つ補語を伴うことが指摘されているが、見出し構文ならではの効果を生むには、映し出されるシーンに合わせて文末名詞の連体の語句に動的な印象を与えるために、助詞には静的で連体的な「の」ではなく、動的で連用的なもの（「が」「を」「に」さらには「で」等）を選ぶことがポイントであると推察できる。

つまり、「イチロー選手が電撃移籍」「尖閣諸島で、新たな動き」と言う場合の「が」と「で」は、次に動的な表現を要求する性格を有するはずであるが、連用的に修飾される用言を欠き、その代わりに表れ結合する語「移籍」や「動き」が動的意味を持つものの、あくまで名詞であるという点で、この見出し構文が特徴的なのである。

こうした独特の効果を生む点では、たしかに本稿で扱ったほかの主題文とはやや異なった側面を持っている。「メジャーリーグのイチロー選手が」と言えば、「メジャーリーグのイチロー選手が行なった(移籍)」という意味合い、「尖閣諸島で、新たな」と言えば、「尖閣諸島で、新たに起こった(動き)」といった意味合いが感じられる。それを端折って「が／を／に／で」等の格助詞を持つ補語を、無題文に代替する格好で受皿語に連体修飾させている。こうした点については、鈴木(2010, 2012)、田中(2012)において言及されていないが、本稿の考察としてここで指摘しておきたい。

なお、前述したがこれに関連して、「ごらんの場面では」と言う場合の主題は「で」を伴うために副詞句であるので、主題ネットワークとは名詞に限ったことではない。「ごらんの場面で」という副詞的な機能を持つ主題ネットワークの中にこそ、「電撃移籍」という新たな動的事態の発生を指す要素情報が含まれる場合があるからである。

見出し構文が使われる同じ状況でも実際に「は」を使った表現がありうる。次は実例である。

(24) クリスマスまで1ヶ月、お目見えしたのは、恐竜のトナカイ。(NHK. 2013/11/29)
この場合は主題が言語形式としてすでに顕現しているが、主題は正に文字どおり、お目見えした情報として視聴者に視覚的にすでに画面上に提示されているものをそのまま言語化したものである。もし言語化しなければ、例えば(25)のようになろう。

(25) クリスマスまで1ヶ月…恐竜のトナカイです。
「クリスマスまで1ヶ月」という前提となる表現が必要なために、シーンに先立って述べられたことで、途中の表現「お目見えしたのは」も省略されずに表出したのであろうが、省略も可能である。「クリスマスまで1ヶ月」がなくてよい場合は、例えば(26)のように無題文が連体節となる文にもなろう。

(26) 子どもたちが驚く恐竜のトナカイです／子どもたちが喜ぶ恐竜のトナカイです。
これは、(27)のように述語動詞の文としては言わないところに見出し構文ならではの存在価値があり、名詞文としてその意味・機能を特徴的に発揮している。あるいは、(28)のような見出し構文も生成可能である。

(27) クリスマスまで1ヶ月、恐竜がトナカイになりました。

(28) クリスマスまで1ヶ月、恐竜がトナカイです。

(29) クリスマスまで1ヶ月、恐竜が変装したトナカイです。

(28)では(4)と形式上は似ており、「トナカイ」が動的な事態を表す名詞ではないために、(4)のように若干言いにくいかもしれないものの、上述したように、「が」を使うことによって(29)の連体節の述部「変装した」を端折った表現になっている。(24)をより見出し構文らしく言うならば(28)のようになるだろう。

(27)を(24)のように述べた時には、田中(2012)のいう「冒頭あるいは新しい話題を切り出すときの」シーンそのものがまさしく「は」によって言語化された「お目見えしたの」として主題化されるわけである。このことは、視覚的場面が主題となっていることを十分に示唆している。繰り返すが、新しい話題を切り出された時が見出し構文の生起の必須条件なのであるから、その中から当該表現が生まれたとみるのは自然なことである。

つまり、無題文とされた見出し構文には、言語化されていなくとも、冒頭あるいは新しい話題を切り出す時の正にその話題（視覚的情報）が主題なのである。そうした主題なくしてはこうした見出し構文は成り立たない。これには、前述の(7)における嗅覚情報「このにおい」と同様のメカニズムが働いていると考える。

ただし、主題ネットワークが見出し構文に先行するとは限らない。次例を見られたい。

(30) 震災から2年。(NHK. 2013年12月4日9時のニュースより)

(30)は、アナウンサーが先行するシーンが映されないままに話し、その後シーンが映し出されたが、転位陰題のような格好で主題ネットワークが後ろに設置されたと考えれば、(30)の見出し構文は、やはり、震災後のシーンに含まれ、取り出される要素情報である。言うまでもなく、(30)の発話後に何も主題ネットワークになるべきシーンが映し出されなければ、(30)が何から湧き出たのかが皆目分からず、言明が完結しないだろう。

前述したが、田中(2012)のいう「民放では、CMに入る直前に、次のニュース項目の紹介としてよく使われるとし、その効果は、視聴者の関心をCM後まで引っ張る」という説明と符合し、CMはないものの、アナウンサーのコメントの後にシーンが映し出されるまで視聴者の関心を引っ張るといって、まったく同じ効果を狙っていると言える。

また、格助詞を伴う補語としては、やはり動的な述語を要求する起点格「から」がその中に現出しているにもかかわらず、受皿語は「2年」という名詞である。鈴木(2010)のいう見出し構文の形式的特徴としての「が／を／に」等の格助詞を持つ補語は、このように「から」も伴いうると言える。

上述した(14)の「広島が」についてここで再考する。つまり、見出し構文を、映し出されるシーンが主題となる主題文と考えれば、(28)の構造と類似したものだと言えそうである。

(31) かき料理は広島が本場だ。(=(14))

(32) クリスマスまで1ヶ月、恐竜がトナカイです。(=(28))

鈴木(2010)では、動名詞以外の「名詞(N)+です」文で、「ガ格の補語を伴う場合には、「ガ格で表される主体がNで表される動き・事態を|起こした/起こしている|」の意味になる場合があるとし、(33)のような文を挙げている。

(33) a. 歌手の××さんが交通事故です。

b. 後継者選びを巡って、××一族が骨肉の争いです。

「交通事故」や「骨肉の争い」に比べて、(31)の「本場」はよりいっそう動名詞からは程遠いがいずれも「が」に後続し、文構造は近いと言える。やや拡大解釈をすれば、広島が(かき料理の)本場を盛り上がらせている(=起こしている)という意味合いに取れる。あるいは、さらに解釈を加えて、動名詞以外の名詞がガ格の補語を前に伴う場合には、ガ格で表される主体がNで表される事態を、その場では新たな情報、時には改めて提示する情報として、強調する働きをする場合がある、と言ってもよい。

実際、もし「冒頭あるいは新しい話題を切り出すときの」シーンとして「かき料理」のシーンが映し出されると同時に、アナウンサーが「広島が本場です」と切り出しても、(34)のように、テレビ的には見出し構文として十分自然に成り立つと予想できよう。

(34) [(今映っているかき料理は) [広島が] 本場です]。

したがって、見出し構文のような名詞文も含めて主題文として統一的に説明するために、主題文のプロトタイプを(35)のように補充したい。これによりさまざまな名詞文が主題文として概ね含まれるものと思う。

(35) [現象描写文／無題文／格助詞を伴う補語]

[[主題] は _____ [受皿語] だ。

ここでいう「格助詞を伴う補語」でいう格助詞とは、「が」「を」「に」「で」さらには「から」といった動詞等の述語にかかる動的事態を表すものであって、「の」の場合は「N1のN2」として、それ自体が受皿語に組み込まれるにすぎなくなる点で区別する。

4. まとめ

これまで、途中繰り返し詳しく述べたつもりなので、まとめとしては詳細の繰り返しは避けるが、考察の流れと構成や概略だけをまとめ、さらに、2つの主題化の違いについて若干の補足説明を加えたい。

本稿では、体言締め文をめぐる、雑例とされる主題文にも注目し「は」の本質的機能を考察しながら、ウナギ文、「かき料理は広島が本場だ」構文、「いい天気だ」構文、さらには見出し構文など、一見特殊とも思われるいくつかのタイプの文をすべてシンプルな構造とみなしつつ、主題文としてのやはりシンプルな原理を探った。すなわち、奇妙であるとされる体言締め文には、実は、ウナギ文にも通じる原理があることを指摘し、さらには、「いい天気だ」構文とも共通した構造を持ちうることを示した。

また、最近になって指摘されている「見出し構文」についても分析を行い、それが無題文ではなく、同じく主題文として解釈できるという可能性を新たに主張した。そして、主題文としてのシンプルな共通点がある「かき料理は広島が本場だ」構文が、若干特殊な機能を持つ見出し構文にも通じる側面があることを考察した。その上で、それらを含めてさまざまな主題文に共通するプロトタイプを仮設した。

ここで、「主題化」ということについては、厳密に区別しておかなければならないことがある。すなわち、まず、従来の「主題化」とは次のようなプロセスである。

(36) このクラスで太郎が人気者だ。

(37) 太郎はこのクラスで < - > 人気者だ。

(36)のガ格名詞が < - > から抜けて文頭に移動し、「は」によって主題化されたというプロセスである。これに対し、本稿ではそうしたプロセスを想定せずに、より統一的に「は」の機能を説明するために、文成立の前から「太郎」という主題ネットワークがあり、その中に取り込まれた「太郎」に関する様々な要素情報の中から、発話時の状況が要求する重要なものを名詞(この場合は「人気者」として抽出し、主題と連結・結合するとした。

こうして「主題ネットワーク」という概念を立て、文末名詞を「受皿語」として捉え直し、それがいかに主題と論理的格関係がないままに結合できるのかについて、そのプロセスを考察した。すなわち、主題ネットワークに含まれる、話者がもっとも述べたい重要な「要素情報」を名詞(受皿語)として取り出し、主題と連結させるということである。そのことで、本稿の捉え方においての「は」の基本原理の説明をより進展させることがで

きると考える。

参考文献

- (1) 新屋映子(1989)「文末名詞」について『国語学』第159集. 日本語学会. 75-88.
- (2) 井上優(2010)「体言締め文と『いい天気だ』構文」『日本語学』29-11. 明治書院. 58-67.
- (3) 大野晋(1978)『日本語の文法を考える』岩波書店.
- (4) 奥津敬一郎(1978)『「ボクハウナギダ」の文法』くろしお出版.
- (5) 尾上圭介(1981)「『象は鼻が長い』と『ぼくはウナギだ』」『言語』10-2.
- (6) 島守玲子(1993)「名詞述語文の構造 談話文法の観点より」『日本語教育論集 世界の日本語教育』3. 国際交流基金. 177-193.
- (7) 鈴木智美(2010)「ニュース報道における『動名詞(VN)／名詞(N)＋です』文について－『現地を緊急取材です』『老舗料亭に問題発覚です』－」『留学生日本語教育センター論集』東京外国語大学. 57-70.
- (8) 鈴木智美(2012)「ニュース報道およびブログ等に見られる『～です』文の意味・機能－『～を徹底取材です』『～に期待です』『～をよろしくです』－」『東京外国語大学論集』84号. 東京外国語大学. 341-357.
- (9) 田中伊式(2012)「ニュース報道における『名詞＋です』表現について～『イチロー選手が電撃移籍です』『尖閣諸島で新たな動きです』～」『放送研究と調査』(月報)10月号. 放送文化研究所. NHK放送文化研究所. 16-29.
- (10) 谷守正寛(2006)「『XハYガZ』文の雑例小考」『日本語の教育から研究へ』土岐哲先生還暦記念論文編集委員会編. くろしお出版. 187-196.
- (11) TANIMORI, Masahiro(1994) 'A Study of the Topic of Sentences' 『日本語教育論集 世界の日本語教育』4. 国際交流基金. 193-208.
- (12) 角田太作(2011)「人魚構文：日本語学から一般言語学への貢献」『国立国語研究所論集』1. 国立国語研究所. 53-75.
- (13) 角田太作(1996)「体言締め文」『日本語文法の諸問題－高橋太郎先生古希記念論集－』鈴木泰・角田太作編. ひつじ書房. 139-160.
- (14) 角田太作(2012)「人魚構文と名詞の文法化」『国語研プロジェクトレビュー』7. 国立国語研究所. 3-11.
- (15) 野田尚史(1996)『「は」と「が」』くろしお出版.
- (16) 半藤英明(2002)「『は』構文の成立条件－『魚は鯛がいい』をめぐる』」『熊本県立大学文学部紀要』第9巻. 39-52.
- (17) 三上章(1960)『象は鼻が長い』くろしお出版.